

日南市・南さつま市行政視察報告



【日南市の伝統的建造物群保存地区】

視察日程 平成26年6月3日（火）～6月5日（木）

視 察 先 宮崎県日南市
鹿児島県南さつま市（加世田麓地区）
鹿児島県南さつま市（金峰地区）

会 派 市民民主クラブ

参加議員 松田俊助、田中 力、中島清晴、永作邦夫、
川口 保

平成26年6月 報告者提出 松田俊助

はじめに

市民民主クラブでは平成26年6月3日から6月5日にかけて宮崎県日南市、鹿児島県南さつま市の行政視察を行いました。ここに報告書をまとめて提出いたします。

日南市の行政視察

視 察 日 平成26年6月3日(火)

視察事項 城下町飫肥(おび)景観計画について

対 応 日南市議会議長

日南市建設部 建設課 計画係 主査

日南市教育委員会 生涯学習スポーツ課 文化財担当監 岡本武憲 氏

日南市教育委員会 生涯学習スポーツ課 文化財係 上村哲規 氏

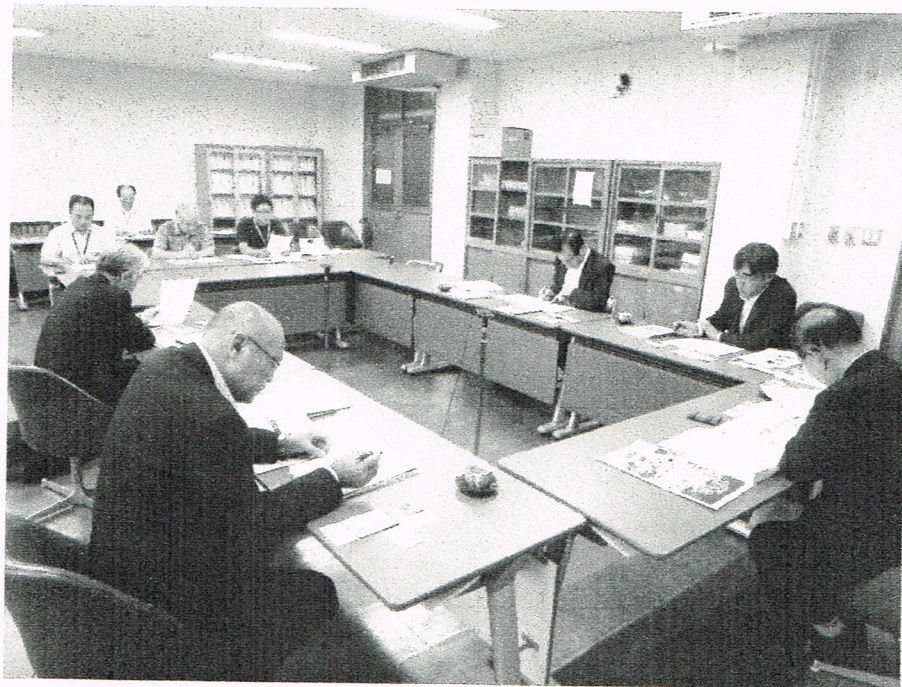
日南市議会事務局 局長 松田正一 氏

日南市議会事務局 議事係 主査 白坂昭仁 氏

日南市役所

〒887-8585 宮崎県日南市中央通一丁目1番地1

TEL 0987-31-1145 (教育委員会)



1. 日南市の概要

日南市は宮崎県の南部に位置し、平成21年3月に1市2町（日南市、北郷町、南郷町）が対等合併してできた都市で、市域面積は536.12km²、人口は約55,000人。

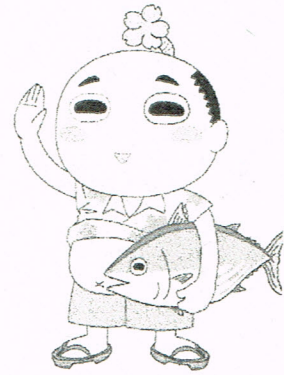
九州の小京都として有名な飫肥（おび）城下町や風光明媚な日南海岸を擁し、かつては新婚旅行のメッカとしてにぎわった。現在は温暖な気候であるため、野球（広島カープ、西武ライオンズ）や、サッカー（湘南ベルマーレ、横浜F.C.）などのプロ・アマの合宿地としても有名である。

日南市の産業は農林水産業が中心で、農業では養豚、養鶏、乳牛などが飼われ、特に「みやざき地頭鳥」は有名である。同市の塚田農場では自家生産のみやざき地鶏や、日南産の素材を使った料理店を東京において100店舗規模で展開している。

林業では飫肥杉が、温暖な気候により生育が早くて軽いことや、油分が多く弾力性があることから、良質な造船材として最盛期には国内はもちろん、韓国や中国にも輸出され、昭和40年代まで日南地方の経済を支えていた。しかしその後、木造船が少なくなり飫肥杉の需要は衰退していった。現在山々に残っている飫肥杉を何とか利用していこうとプロジェクトチームが結成され、家具などへの利用を推進している。

水産業では一本釣りカツオの水揚げが日本一で、市内の飲食店では、ご当地グルメ「カツオ炙り重」が同一価格（1300円）で提供されている。

また日南市は世界三大花木の「ジャカランダ」の生息地でもあり、2004年に放映されたNHKの朝の連続テレビ小説「わかば」の舞台となったところでもある。



日南市の人気ゆるキャラ

「にちなんじゃ様」

2. 城下町飫肥景観計画について

1) 日南市の景観活用事業の取り組みの経過について

日南市では平成21年3月に1市2町で合併したが、それ以前の平成17年8月に日南市らしい景観づくりを進めていくために「景観法」に基づく「景観行政団体」となり、平成19年1月に「日南市美しいまちづくり景観基本条例」や「日南市景観形成基本計画」を作成して、魅力ある景観づくりを推進してきた。

平成19年11月には堀川運河を中心とした港町としての歴史的遺産の活用を目的とする「港町油津 景観計画」を施行し、合併後の平成25年5月には全国棚田百選に選ばれた「坂元棚田」のある酒谷地区を中心とする「棚田の里酒谷 景観計画」を施行して、地域の特性に調和した美しい景観づくりに取り組んできた。

2) 飢肥の歴史と伝統的建造物

「飢肥」の地名は平安時代の書物に記述されている古いもので、南北朝時代には飢肥に城が築かれ、在地領主の島津氏と、日向の都於郡に城を構える伊東氏が何代にも渡って争いが繰り返されてきたが、秀吉についた伊東氏が飢肥の地を与えられ、飢肥藩5万1千石として幕末まで支配することとなった。

飢肥の城下町では飢肥城に近い方から、上級家臣、中級家臣、町家、下級家臣の屋敷配置となっており、武家屋敷は格式に応じて門を構え、周囲は石垣で囲まれ、その石垣の上にはお茶などの生垣が設けられている。

明治時代以降は時代の流れの中で、建物の多くは建て替えられたり、一部の屋敷地の細分化も進んでいった。

しかし、飢肥の町並みは、商人町の大通りが拡張されたこと以外は、1650年代のものと推定される城下絵図とほとんど変わることなく、町割が残っており、飢肥の武家屋敷の特徴である石垣と生垣、格式の応じた門構えを残すことになり、そのことが高く評価され、昭和52年(1977)九州地方で初の国の「重要伝統的建造物群保存地区(伝建地区)」に選定された。



復元された飢肥城跡の大手門

3) 日南市飢肥伝統的建造物群保存地区事業

昭和50年の文化財保護法の改正により、伝統的建造物群保存地区制度が発足し、城下町、宿場町、門前町など歴史的な集落や町並みの保存が図られるようになった。平成25年4月1日現在の同保存地区は104地区(同年度の追加地区含む)となっている。

日南市では、昭和50年に伝統的建造物群保存対策調査を実施し、翌昭和51年に保存条例が議決され、同52年に九州初の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。



預章館(旧飢肥藩主伊東氏の住居)

地区の面積は19.8ha、世帯数158世帯、人口は360人、全建物数は321棟。現在の保存物件は伝統的建造物として、建物では旧飢肥藩主伊東氏の住居(預章館)など11件、工作物127件(石垣105件、門16件、塀6件)、また環境物件として23件(生垣)が選定されている。

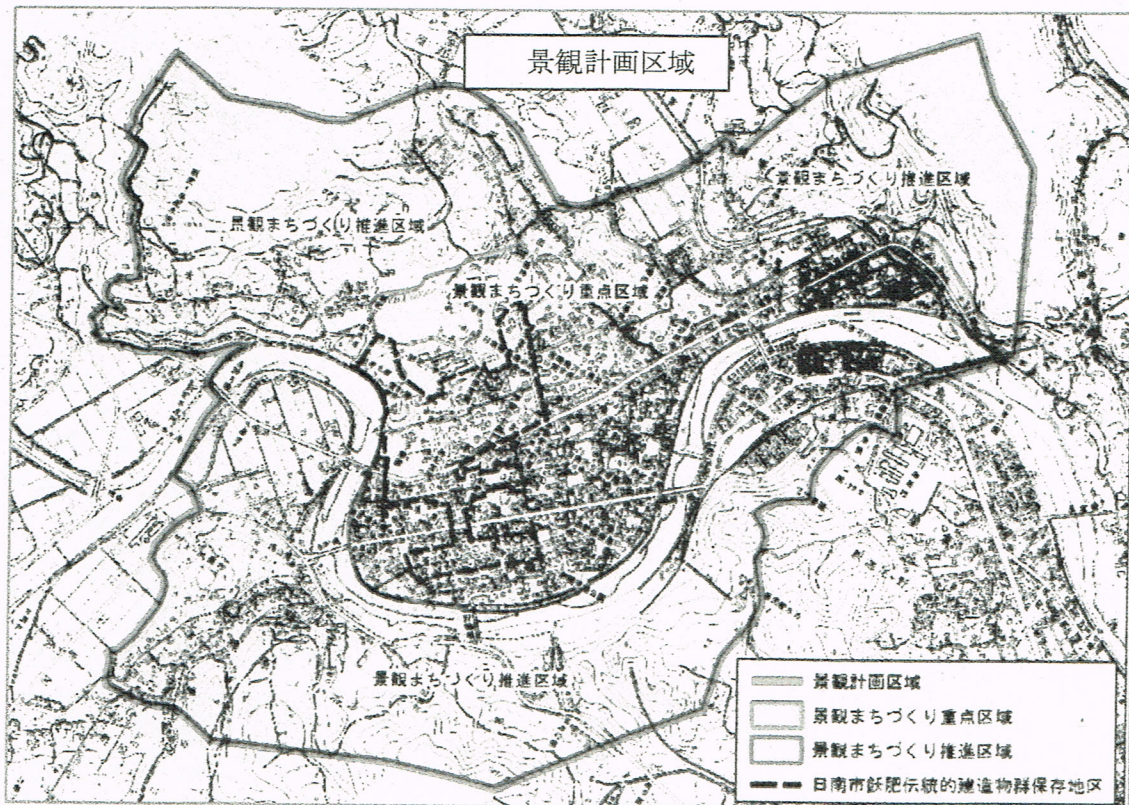
この伝統建造物に認定された建物の外観の改修には届け出が必要となり、日南市伝統的

建造物群保存地区保存審議会で審査をして許可を出す。地権者にとっては制約されるが、その代わり改修費の8割の補助金を上限なしで出すことになっている。補助金の財源は国65%、県10%、市25%となっており、これまでの改修は150件、9億1000万円が使われている。なお外から見えない内部の改修には届け出は必要ないが、補助金も出ない。

4) 城下町飢肥景観計画の取り組み

「城下町飢肥景観計画」は飢肥地区において、良好な景観を維持し、後世に伝えていくために、「景観まちづくり」と位置づけ、平成26年5月1日から施行された。

景観計画の対象となる景観計画区域は、次図に示すように酒谷川の兩岸の地域である。このうち赤く塗られた地域は「景観まちづくり重点区域」約97haで、伝統的建造物群保存地区を中心に城下町としての町割と歴史的建造物が残る地区。青く塗られた地域は「景観まちづくり推進区域」で明治以降に市街地として発展した所で、石垣や生垣を有する民家が点在する地区。



この景観計画では次の4つの基本方針を示している。

- ①歴史と文化を感じ、周囲の緑と調和した広がりのある歴史的まちなみ景観を守る

- ②憩いや潤いのある道筋や川沿いの景観を育てる
- ③まちの宝となる歴史的・文化的景観遺産を守り、活用し、後世に引き継ぐ
- ④協働によるまちづくり体制を確立し、地域の価値を高める景観まちづくりを推進する

この基本計画の中では、飢肥城の城下町を中心とする伝建地区と伝建地区以外の歴史的景観を残すまちなみ、城下の外堀の役割を果たしてきた酒谷川などの自然資源などを守り、活用し、後世に引き継いでいくため、地区の自治会、観光ガイドボランティア、城下町保存会などの地域活動団体、サポーターなどとの協働により、地域に埋もれた景観資源を発掘し、魅力を高め、全国に発信していくとしている。

3、所 見

かつては新婚旅行のメッカとして人気のあった宮崎県。当時はこの地方へも多くの新婚旅行者が訪れたが、現在その姿はほとんど見られないということである。同市は飢肥藩5万1千石の城下町として栄えた地区で、町割のほとんどは当時のまま残っている。この城下町のまちなみや建物、屋敷跡などを保全して活用していこうとするのが、城下町飢肥景観計画である。

昭和49年に就任したばかりの河野礼三郎市長は、市をあげての飢肥城の復元事業を打ち上げた。しかし市に財源がないため、「飢肥城復元促進協力会」を発足させ、全市をあげて募金活動を実施した。そして昭和51年から53年にかけて飢肥藩の藩校であった振徳堂の改修、大手門の復元、歴史資料館の建設など総事業費5億2千万円のうち2億2千万円を募金で賄った。

またこの間の昭和52年に日南市飢肥地区は重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けた。これは今から37年も前のことで、歴史的景観の保全はいかに早く取り組むかがカギとなり、河野市長の先見の明が大きい。飢肥城の復元前や伝建地区の選定前には飢肥を訪れる観光客はほとんど無かったということであるが、現在は年間20万人以上が訪れているということである。

同市の歴史的景観を代表する飢肥城跡を市の担当者の案内で訪れたとき、ランドセルを背負った小学生の女の子が、城から下りてきて驚いた。子どもと城跡が結びつかなかったからである。しかし後で分かったのだが、城跡の本丸などの屋敷跡に小学校が建てられていたのである。

侍の時代が終わった時、日本中の多くの城の建物は民間に払い下げられ、取り壊された。国宝であり、現在日本の美しい城を代表する姫路城とて当時民間に払い下げられ、取り壊しの寸前までいったということである。そしてこの飢肥城の建物も明治6年に取り壊された。明治という新しい時代になり城の建物が取り壊され、松阪城など多くの城で堀が埋め

られ、城郭の中に学校や役所が建てられていったが、飢肥城を中心とする景観計画が進められる中で、城跡の中心部に建てられている学校には少々興ざめがして残念な気がした。市の担当者は「今更学校の移転もできないし」ということであった。

城下町というところは我が松阪市も同じであるが、松阪市の場合武家屋敷としては御城番屋敷のような長屋であるのに対して、石垣や生垣で囲った立派な武家屋敷があるのはうらやましい気がした。しかし城跡の保全に関しては松坂城跡の方がはるかに優れていると思う。

飢肥に限らず伝建地区に指定されると、そこに住む住民にとっていろいろな制約が発生する。敷地内に車進入のため石垣を崩して入口を確保することもできない。建物などの改修も申請をして許可を得てからでないと実施できない。しかし歴史的景観の保全は、制約と多くの人達の協力があってこそできるのである。

南さつま市の行政視察

視 察 日 平成26年6月4日（水）

視察事項 加世田麓地区の歴史的建築を生かした街づくりについて

対 応	南さつま市会議長	古木健一 氏
	南さつま市教育委員会 生涯学習課 文化係長	永田正人 氏
	南さつま市議会事務局 事務局長	末長 茂 氏
	南さつま市議会事務局 庶務調査係長	田原 公 氏

南さつま市役所

☎897-0003 鹿児島県南さつま市加世田川畑 2627 番地 1

TEL0993-53-2111 内線 2409（教育委員会 生涯学習課）



1. 南さつま市の概要

南さつま市は鹿児島県薩摩半島の南西部に位置し、西側は東シナ海に接する。平成17年11月に1市4町（加世田市、笠沙町、大浦町、坊津町、金峰町）が合併してできた都市で、市域面積283.37㎢、人口は約37,000人。

南さつま市の基幹産業は内陸部の農業と沿岸部の魚業である。特産物としてはかごしまブランドの加世田カボチャや、きんかん春姫、砂丘らっきょう、金峰コシヒカリ、また天然ブリや焼酎などがある。

市の北西部には日本三大砂丘の1つ「吹上浜」が広がり、砂丘の砂でいろいろな造形を競う砂の祭典や、自転車による様々な大会が開かれている。砂の祭典には12万人の観光客が訪れる。

この吹上浜は太平洋戦争末期の最後の特攻隊の出撃地である万世飛行場があったところで、終戦間際に201名の若者たちが特攻隊としてが出撃していった。その特攻隊員の遺書や写真などを展示する「万世特攻平和祈念館」が吹上浜の一角に建てられている。

南西部の海岸線は変化に富んだリアス式海岸が続いており、国の名勝「坊津」や県立自然公園の景勝地を有している。



吹上浜で行われる砂の祭典

2、加世田麓地区の歴史的建築を活かした街づくりについて

1) 加世田地区の歴史と歴史的景観

加世田別府城は島津家の居城で、島津忠良（日新公）は元服して伊作島津家当主となり21歳のとき相州島津家も相続し、天文8年（1539年）、薩州島津家の加世田別府城を攻め落とし加世田に移り住んだ。忠良は仏教・儒教・神道の三教を極め、政治・経済・文化で善政をしいた。忠良がつくった「日新公いろは歌」は薩摩論語とも言われ、明治維新を成し遂げた薩摩の志士たちにも大きな影響を与えた。

加世田麓地区は、加世田城を取り囲むように形づくられており、薩摩藩が江戸時代に城の護衛のために周辺に武士を住ませた地域である。

現在でも江戸時代末期以降に造られた武家屋敷や武家住宅、門、蔵などが残されており、藩政時代（明和5年 1786年）に造られた益山用水路が街なかを流れている。

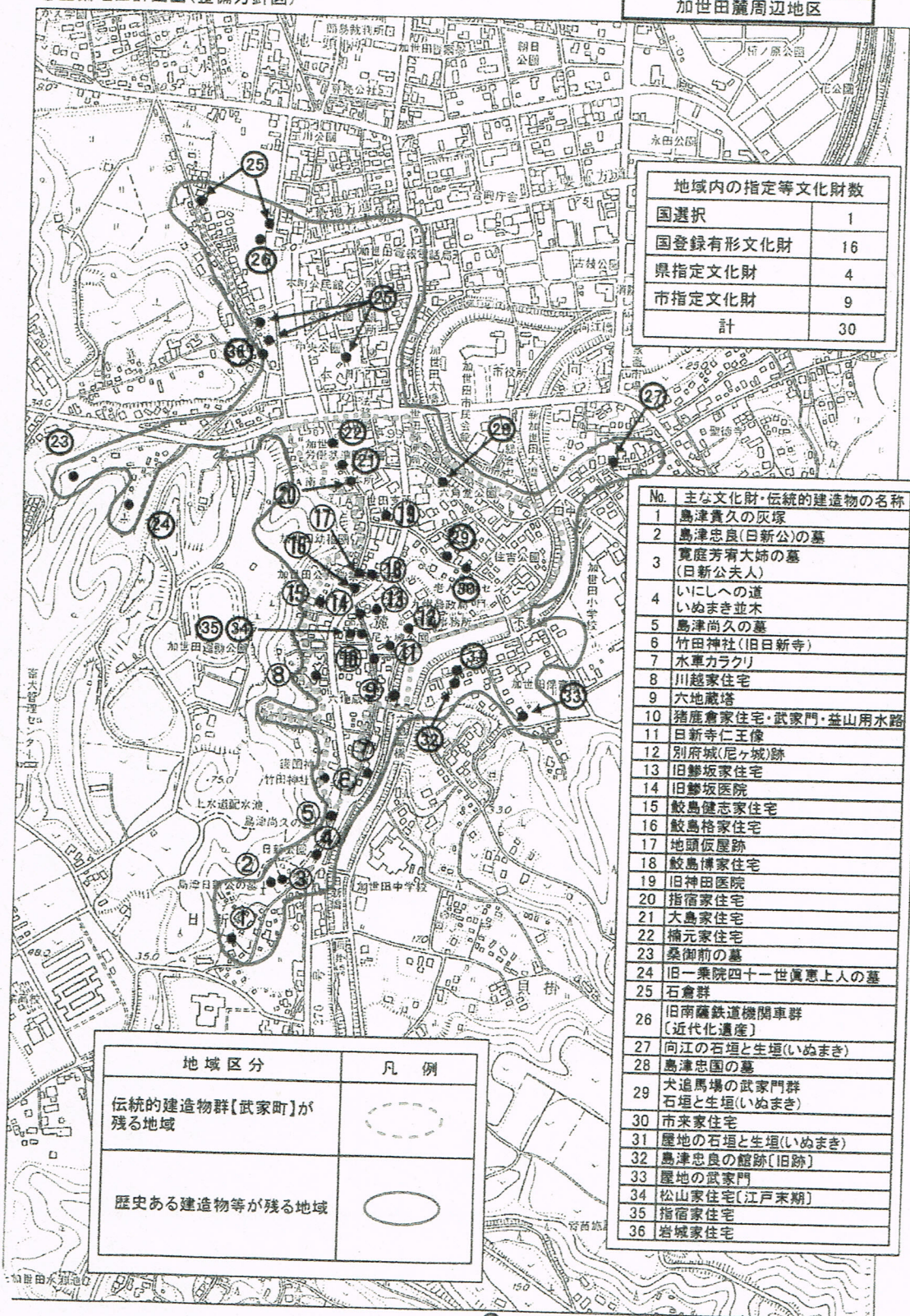


明和5年(1786)に造られた益山用水路

2) 歴史的建築を活かした街づくりの取り組み

歴史的建築を活かした街づくりの整備計画図を次に示す。この中の赤色線で囲った部分が約40haの伝統的建造物群が残る地域で、別府城を囲むように武家屋敷が配置され

②整備地区計画図(整備方針図)



ており、江戸末期以降に造られた屋敷や建物が残っている。

この中には国の有形文化財としての旧鰺坂医院や鰺島家住宅、また市が取得し昨年6月に国登録有形文化財になった旧鰺坂住宅などがある。

また青色線で囲った部分は、歴史ある建造物等が残る地域で、加世田本町には、明治24年の県道開通や、大正3年の南薩鉄道開通に伴い賑わった本町商店街があり、同鉄道の廃線後も残る石蔵や蒸気機関車など当時の面影を今に伝える近代的遺産も残されている。

この様に武家屋敷だけではなく、明治時代以降における規模の大きな豪士の邸宅や近代和風住宅、洋館なども残っており、「武士・豪士の街」として価値を再認識し、景観を保全しながら、街の活性化を図っていく。

3) 歴史的建築を活かした街づくりと伝統的建造物群保存地区への申請

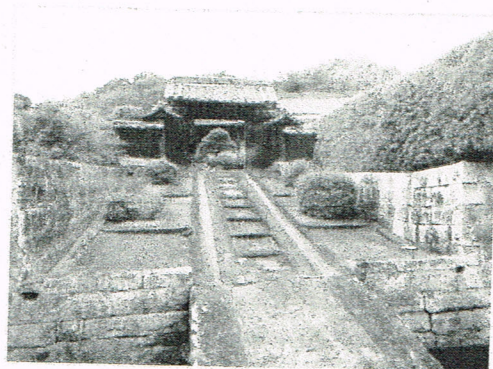
加世田麓地区の伝統的建造物群保存地区への登録に向けての活動は、平成22年から進められているが、もともと地元からの要請で始まったもので、民間に引っ張られる形で行政が進めてきた。これまで文化庁からの現地視察の受け入れや意見交換が行われているが、同保存地区の指定はまだ先のこととである。また補助金などもこれから決めていくことになる。

歴史的風致の保存活用物件は、歴史的工物として建物40棟、武家門40件、その他石垣、石橋、洗い場、井川、井戸などあり、また環境別件として益山用水路、生垣、庭などがある。

今後の進め方として、

- ①鹿児島大学・工学院大学と連携をして加世田麓地区の建物などの調査
- ②歴史的建物等や本町に残る近代化遺産の保全と活用について、加世田歴史まちなみ懇談会等での話し合い
- ③文化庁との協議、調査報告書の作成・提出、そして文部科学省への「重要伝統的建造物群保存地区選定（指定）申出」を行う
- ④国の文化審議会が選定（指定）の答申
- ⑤文部科学省が告示、登録となる

南さつま市では伝建地区の登録、そしてさらに整備を進め、観光客の誘致に期待している。



伝統的建造物の1つ鰺島格邸

3、所 見

九州の薩摩半島では、半島の東側、南側の海岸沿いには鉄道が通っているが、南さつま市などの西側には鉄道がなく、今回の視察も鹿児島中央駅から約1時間半の路線バスでの移動であった。

レジャーの場合であるとレンタカーやタクシーなども使えるが、いずれにしても観光客誘致には鉄道がないのは不利な要件となる。

同市ではこの様な不利な条件を越えて観光客を呼び込むために「歴史的建物を活かした街づくり」の取り組み、そして「重要伝統的建造物群保存地区」の認定に期待を寄せている。

伝建地区の認定を巡っては、事業を進めようとする行政側と、認定を受けると建物の改築や、庭園の整備に制約を受ける地権者側との間でトラブルが発生することもよくある。しかしここでは住民側からの歴史的建造物の保存への要請で始まったもので、このようなトラブルはないという。住民の人達の歴史的建造物の保存への意識が高いと言える。

九州の伝建地区でよく引き合いに出される南九州市の知覧は、昭和56年(1981)に、また前日視察を行った日南市の飫肥地区は昭和52年(1977)に認定を受けており、いずれも30年以上も前の認定である。南さつま市の場合認定までもう少し時間がかかるが、保全と活用に向けて動き出している。

南さつま市（金峰地区）の行政視察

視 察 日 平成26年6月5日(木)

視察事項 牛舎及び飼料工場の公害について

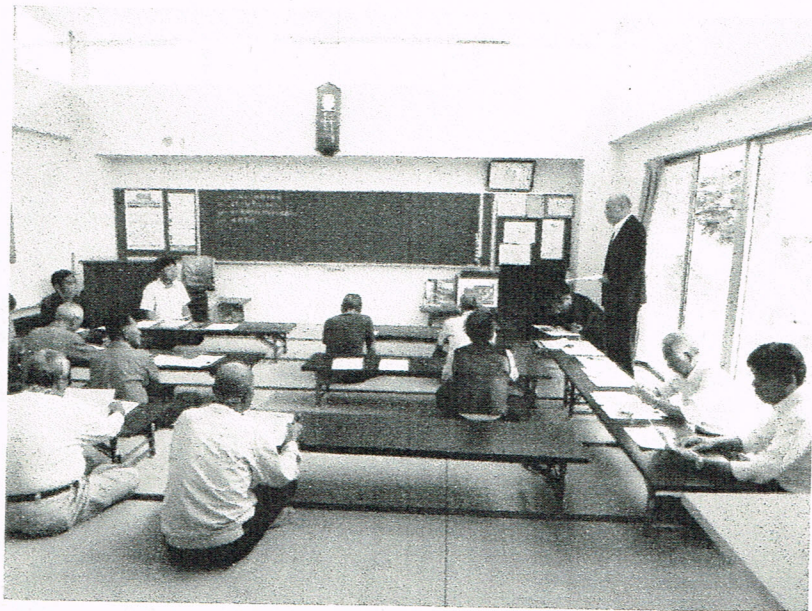
応 対 金峰見みまもる会 会長 下 蘭 政治 氏

同 副会長 宇治野隆之 氏

同 地域代表 米満 明則 氏

金峰地区の皆さん 約20名

霧島市市議会議員 中村 満雄 氏



浦之名東コミュニティーセンターで説明を受ける

1) 視察の経緯

松阪市下蛸路町の山林に1000頭規模の牛舎の建設が計画されている。そしてこの飼育頭数はさらに増え続け、数千頭にもなる可能性も考えられる。この計画地の近くには住宅団地など多くの市民が住んでおり、悪臭やハエの発生が心配され、また農業用水などへの影響も心配されることから、反対運動が起きている。

今回私たちは牛舎と飼料工場の悪臭や騒音、またハエの発生や汚水の流出などに苦しむ鹿児島県南さつま市金峰町を訪れ、住民の皆さんから話を聞いた。

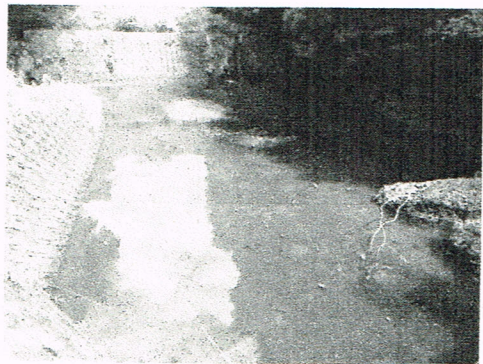
この視察は、鹿児島県霧島市で畜舎の建設反対運動を繰り広げ、計画を撤退させた霧島市市議会議員の中村満雄さんの仲立ちで実現しました。

2) 金峰町の現状

平成5年に地元の小さな牛舎を鹿児島市の業者が買い取り、急速に頭数を増やしていった。業者が社名を(株)カミチクと改名して、現在この場所で1600頭の牛を飼っている。5年前には飼料工場が建設された。

現在発生している問題は、①牛舎からの悪臭、②ハエの発生、③牛舎からの汚水の流出④飼料工場の騒音、⑤低周波騒音による不快感など。

説明された人の話では「大事な友人が訪ねてきたが、悪臭とハエのため早々に帰ってしまい、二度と来なくなった」とか、「飼料工場の騒音は特に一昨年ごろから大きくなり、土日・祭日・時間帯に関係なく聞こえるため頭がどうにかなりそうである」とか、「低周波の発生では山へ枝打ちに行っても2時間が限度で帰らなくてはならず、また山に登っていた女子会の人達もすぐ下りて来た」など話をされた。汚水の問題では牛舎の立地の水系の水が、ため池に流れ込むことから健康被害や、ブランド米「金峰コシヒカリ」の風評被害が心配であるなど話をされた。この汚水問題は、市議会で現地視察するときだけは水がきれいになっているということである。



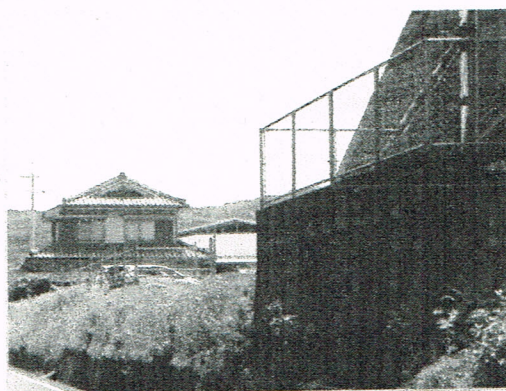
汚水の流出が問題となった排水路

3) 改善に向けての動き

平成25年11月29日に浦之名東コミュニティーセンターで、本坊南さつま市長と(株)カミチク(牛舎・飼料工場)の騒音や汚水の件で意見交換会を持った。この時は市長は流域住民の苦痛に対して謝罪するとともに、公害を発生させないための措置を講じることを約束した。

平成25年12月に(株)カミチクに対して約50人の住民が参加して交渉をしたが、参加人数が多すぎてまとまらず、1時間半の会が終了した。住民は地元へ帰ってから今後の交渉の仕方を話し合い、現在あるものをどのように改善していくか、騒音についてはここまで、悪臭についてはここまでという形を示して交渉していくことにした。

平成26年3月19日金峰文化センターで(株)カミチク・錦江ファームと交渉が持たれ、この時住民側から8項目の改善依頼をしたが、業者側は一番影響の大きい騒音問題から取り組んでいくことを約束した。騒音については当面ラップロール(飼料の牧草などを大きなボール状に巻いたもの)の高さを嵩上げて対処し、これで効果が得られない時は、防音壁を設けるという約束を取り付けた。低周波については原因がよく分からないことから、原因究明に第三者で取り組み、改善できるように努めることを確約した。また早朝4時から行われている搾乳は5時半からすることに改善された。



牛舎に隣接している民家(手前が牛舎)

その後、污水対策として15m×15mの汚泥タンクを設置し、定期的にくみ取り、センターで処理する。防音装置のついた機械の導入により、100%の騒音を80%~70%に落とした。また行政として72時間の騒音調査を年2回実施することや、今年に入ってから水質調査定期的に実施することになった。

4) まとめ

牛舎の建設に反対している松阪市の地区住民と、出来てしまった牛舎の公害に苦慮している地区住民と立場は異なるが、今回良い勉強をさせてもらった。

牛舎などの大規模畜舎ができる時には地元説明会がなされ、悪臭は出しません、騒音は出しませんと言うことになるが、実際出来てしまうとその約束も怪しいものになる。視察先の金峰地区は自然が豊かな環境の素晴らしいところである。この地域の住民は牛舎と飼料工場2つからの悪臭や騒音に悩んでいて、出来てしまったものはどうしようもなく、少しずつ改善に向けての活動がなされているが、もとの平和な地区に戻れる可能性は少ない。年寄りの人がこんなに悪臭と騒音の中で人生を終えるのかと、もらしたと言う。

南さつま市はこの牛舎建設には推進の立場をとっており、また当時反対派の組織の会長が途中から賛成にまわり、また市議会議長をなど当初反対していた多くの議員も賛成にま

わってしまった。その結果そのツケは、最後は地元住民に回ってきてしまった。

松阪市の山中市長は、今回松阪市内に計画されている牛舎建設に対して、地元が反対であれば市として認可しないと明言している。賢明な判断であると思う。

ー以上

(報告書作成 川口 保)